

## 繪日記にそへて

こ　う　し

兼ねて自分は、繪日記といふものを、つけて見たいと思つてゐたが、筆不精なのでつい、のび／＼になつてしまつた。尤も二三年前におほつかない筆で、珍妙なやつを、ものした事があつたが、三ヶ月ばかりしか續かなかつた、自分の様に不精なそれで根氣のよはい者には、到底長くは續くまいからせめて短い期間だけでも、つけて見ようと思つて、昨年の夏、暑中休暇繪日記と云ふのを書いて見た。

繪日記と云つても、繪が主なのか、文句が主だか、解らないのもあるし、又其處へ種々のものを書き入れたものもある、といふふうには、まとまりのつかないもので、まあ雜記帳だと思つて頂けば差支へあるまい。一體自分は、小供が好きなので、此の日記なども小供に關する記録が多いのは、豫め、おことはりして置く。それから成るべく原文を害はない様にと思つたが、もと／＼繪日記なのだから、繪がなくては、わからないのもあるし、人に見せては、悪い——悪いと云つても別に秘密でもないから安心したまへ。まあ露骨にいへば、某に關する批評、悪口、さういふものは、其の人の名譽にかゝはる事だから、多少の添削を加へた。

四十四年七月十七日　晴

赤羽の善坊(親戚の兒)今年五つといふをつれて、正満寺へ參詣

に行く。僕の両親、並に兄の眠つてゐる暮の傍の樹木は、暫らく見ないうちに、青々と繁つて、蟬の宿となつてゐる。「誰れのお墓」と聞く故に「兄ちゃんのお父さんのお墓」と云ひきかせば、しばらく考へて、「いや坊はお母さんが死んだのだから」と。善坊の母は、つい先達この最愛の一人兒を残して黄泉の客となつてしまつたのだ。僕は、この可憐なる言葉に思はず顔をそむけた。

同十八日　晴

善坊をつれて淺草の觀音様へ遊びに行く。休暇早々この天氣のいゝのに遊びに出かけるのは心ぐるしいが、母なき善坊が行かう／＼と云ふのを見ては、たまらなく、いぢらしくなつて、とら／＼行くことに決定した。

同十九日　晴

月島へ寫生の場所をさがしに行く。

同二十日　晴

大井より小姉上と、きみちゃん(僕の姪)来る。僕の最愛なるきみちゃんは今七才で、來年から學校へ行くのだ。其の愛くるしい眼、ふくよかなる頬、しどけない口、ふさ／＼した黒髪、叔父の慾目か、なか／＼美人だ、僕が大井の姉の家へ行く度にスケッチ、ブックのモデルに成つてくれるのだ。きみちゃんは相變らずハイカラと、りぼんと、そして繪をかいてもらうのが好き。此の夜、僕と三人で鈴木へ落語を聞きに行く。小さんのはなしは、わざとらしくなくて面白くなかつた。二人共とまる。

同二十一日 曇

午前きみちゃんをつれて兩國へ遊びに行く。午後より金森様の説教あり。此の日涼しくてよし、夕方姉上大井へ歸らる。「きみちゃん、さようなら歸つたら、お父さん、お母さん、順ちゃん、えつちゃんに宜しく。それから、まる(犬)にも宜しく」。

同二十二日 曇

吳服橋のそばで寫生をなす。

同二十三日 雨

終日店へ出て怪談百物語を読む。

同二十四日 曇後晴

大井より大姉上えつちゃん(僕の姪)をつれて來らる。人形の好きな、そして多辯なえつちゃんは、羞かしいのか、何も言はずに叔母様に頂いた香袋を大事そうに手に持つて、三階へ上つたり下りたりして遊んで居る。えつちゃんは姉の末見できみちゃんと、善坊と共に僕の大好きな小供だ。

同二十五日 曇時々雨

久しぶりて朝早く河岸へ寫生にいつたが、雨にあつて歸て來た。午後から丸の内へスケッチに出かけて、又雨に逢た。今日はよく／＼雨に縁があると見えて、歸ると到來物だといつて水飴の御馳走だ。

同二十六日 晴風強し

昨夜大暴風雨が襲來した。それが爲め州崎、月島、品川、大森其の他の海岸へ海嘯がをしよせて、家たをれ人或は死し或は行

衛不明、慘又慘、此の前の出水よりも甚しと新聞に出て居る。

午後報知社へ扇面展覽會を見に行く。此日荷物を脊おつたのや小供をつれたのやが、深川あたりから避難して來たのだらう、ぞろ／＼と通つていつた。

同二十七日 晴

月島が暴風雨の爲めにやられたので、僕が描かうと思つて居た處もおちやんになつた。

同二十八日 晴後曇

丸の内の繪を家で描いて見たが、裂いてしまつた。家で繪をこしらへる事の不可なるをつくづく感へた。別に繪を製造しようと思つてやるのではないが遊んで居ると、ついでいたづらをやつて見る氣になる。小人閑居して不善をなすかな。

同二十九日 曇

曇たり、晴れたり、降つたり、いやな天氣だ。寫生には出られず、ぼんやり暮してしまつた。夜、來そうであつた西南の夕立雲は遂にこぎ、たゞばら／＼と落ちたばかりだつた。

同三十日 曇

隣りの家に美顔術と示ふ兄弟がある。朝から晩迄よくいたづらをする。然し今日は僕のモデルになつてくれた。美顔術本名を兄は時ちやんと云ひ、弟を繁ちやんと呼ぶ。其の家が美顔術をやつて居るので此の名がある。但しこれは僕の家ばかりの呼び名である。

同三十一日 曇

店に居ると月末といふので諸方から掛取がくる。掛取の口上を聞きながら、新年會で自分が掛取になつた事を思ひ出して思はず微笑をもらした。

八月一日 晴

望月、山口兩君よりの葉書が届いた。數多く來る手紙の中で、親しき友からのそれより温情の溢れた嬉しいものはないが、わけて籠城と覺悟を定めた身が、旅行先きの友より送られた手紙は一倍と懐しさが深い。山口君のには、赤城、瀧澤の兩君と葉山の加藤君の別莊へ行たが、繪はかゝず例の◎式を演じたと書いてある。(但し◎式とは當時研究所での流行語である。)望月君の文面は足尾へ相田君と來て居るが天氣が悪くてこまる云々と云ふのである。

同 二日 曇時々晴

日比谷公園へ寫生に行く。暑いので人が出て居なくて寫生には都合だつた。

同 三日 雨

肖像畫のいたづらをする。夜、久しぶりで五目ならべをした。僕大に景氣よし。

同 四日 雨時々曇

澤庵禪師とむらく落語集を読む。

同 五日 快晴

此の間中、雨で商賣の出來なかつた大道商人は、久しぶりの上天氣といふので水天宮の縁日へつめかけるはく、十一時頃に

は店を出す所がないくらいになつてしまつた。

同 六日 晴

日比谷公園で寫生をして居ると、後へ二人の小供が來て一人は學者がえらいと云ふ。一人は繪かきがいと云ふ。「そんならお前なせ學者がい」と一人が問ふ。「なぜつておまへ、繪かきだつて讀みかきが出来なくちやならないだらう、そうすれば學者の方がえらいじやないか」馬鹿いへ、繪かきはな、一寸人が看板を描いておくれつていへば描けるしな、繪葉書を頼まれりやすぐ描けるだらう、そうすれば繪かきの方がえらいじやないか」と一人が云ふ。何方がえらいと此度は僕に問ふ。僕が無言で居ると又小供が一人來たのでそれに聽くと學者の方がえらいと云ふ。遂に畫家好きの小供はだまつてしまつた。

同 七日 晴

寫生に行く時は暑い、實に暑い。兩手に道具をもつてそれに汗が近眼鏡の間へ流れ込んで、眼鏡が曇つて一間先きも模糊として見えない。當座の内こそ神祕的だなんて樂觀しても見るがこいつが眼の淵へ溜てぼたりと頬へ流れ出すとたまらなくなる。繁華な日本橋通りで一々道具をおろして汗を拭くのは何だかおつくうだ。大低は目的地迄我慢してしまふ。さて繪にとりかゝると苦しくもあり面白くもあるが、いくら、もがいても思ふ様な色が出ないで強腹でたまらない。月を頂いて歸途につくとき、それが一日に於ける一番たのしい時だ。暑さ苦しさを忘れて思ふ様となりながら丸の内の原へかゝる時、それが

歸途に於ける一番愉快な時だ。

同 八日 晴

夜、例の美顔術兄弟と陣取りをして遊んだ。

同 九日 雨

久しぶりで研究所へ遊びに行つた。相變らず小供が大勢さわいでいた。赤城さんは丁度湯へ行つて留守だつたが暫らくして歸つてこられ、懐しい物語りはいつ迄でたつても盡きそうにもなく、いつしか夕方になつてしまつたので九月を期してわかれをつげた。

同 十日 雨

みづゑ等よむ。昨日よりの大雨で又々出水の號外が出た。

同 十一日 晴

日比谷で又新たに氣に入つた場所を見つけた。

同 十二日 曇時々晴

日があたつたり、曇たりして何する事も出来なかつた。

同 十三日 晴

大奮發で繪葉書を四枚かいた。

同 十四日 晴

丸の内へかかると數人の土方が一生懸命に働いて居る。僕も彼等の様に暑さと奮闘せねばならぬ。あらん限りの全力を注いで勉強せねばならぬ。人は無意味な努力と笑ふかもしれない。然し僕は無意味な努力はやがては何物をかなす源だと信じて居る。無意味な努力はしたくない。描きたい時でなければ描かない。

いといふ人はそれでよい。悲しい哉僕の現在はやつぱり努力主義、こつ／＼主義を續けるより致方がないのだなあ——とこんなことをあるきながらかんがへて見た。

同 十五日 晴時々曇

夕方驟雨が襲來した。夜水天宮へ行つて見たが驟雨の爲めかあまり人出がなかつた。

同 十六日 曇大風時々雨

又々颯風の襲來で號外が出た。

同 十七日 晴

延びに延びた煙火は此夜だ。三階の座敷はきれいに掃除されて客の來るのを待ち顔だ。勝手ではおはぎをこしらへるのや枝豆をうでるに忙しい。

同 十八日 曇

河合氏午前に来らる。午後より善坊を乳母車へ乗せて大川へ蒸汽を見に行く。

同 十九日 曇後雨

善坊をつれて上野の納涼博覽會を見に行く。

同 二十日 曇後雨

例の美顔術と善坊と仲よく遊んで居たが喧嘩を始めては二人とも泣き出した。ピスケットは二人の間を又もとの様に仲よくさせた。そして二人はたのしそりに旗かくしをして遊んだ。此日善坊赤羽へ歸る。

(おはり)